

堀河百首題「関」をめぐって

内藤 愛子

堀河百首題には、『堀河百首』の成立以前に歌題として定着していない歌題が多数みられ、殊に、雑の歌題のほとんどが定着されていない歌題である。その雑の歌題二十歌題のうち、「山」「河」「関」「橋」「海路」の六歌題は、拙稿で既に述べたように、歌枕を詠み込んだ歌が多数を占めるという特徴が、みられる。しかも、雑の歌題配列のなかでそれら六歌題は集中的に配列されており、それらの歌題が設定、配列されるに当って、少なからず、歌枕・名所・地名を意識した歌題と捉えられる。また、それらの歌題のもつ性格上歌枕・名所・地名が不可欠な要素であったと思われる。

今回は、それらの歌題のひとつで、しかも、堀河百首題と歌題の一致率が高く、しかも『和漢朗詠集』にみられない歌題である「関」を取り上げて、その歌題をめぐって私見を述べてみたい。

「関」の歌題において、歌枕・名所・地名を詠みこまれた歌は十六首中十四首にみられ、詠じられている歌枕、名所、地名は「逢坂の関」「川口の関」「清見か関」「衣の関」「白河の関」「須磨の関」「砺波の関」「勿来の関」である。それは、「山」「河」「野」「関」「海路」の六歌題のなかで一番数少ない歌枕、名所、地名の数をしめしている。

それら「関」に詠まれていた八ヶ所の関所の歌枕地名を歌学書で見ると、『能因歌枕』『和歌初学抄』『五代集歌枕』『八雲御抄』等には、「関」の分類が成されている。しかし、八ヶ所すべての歌枕地名が記載されているのは見当らない。例えば『能因歌枕』をみると、「関を

よまば、あふさかの関、白河の関、衣のせき、ふはのせきなどを読むべし」（広本）とある。

だが、『枕草子』の「関は」の段には

関は逢坂。須磨の関。鈴鹿の関。岫田の関。白河の関。衣の関。ただごえの関ははばかりの関と、たとしへなくこそおぼゆれ。横はしりの関。清見が関。みるめの関。よしの関こそ、いかに思ひ返したるならんと、いと知らまほしけれ。それを勿来の関といふにあらん。逢坂などを、さて思ひかへしたらんは、わびしかりなんかし。

とあり、堀河百首題「関」に詠じられている歌枕のうち、「砺波の関」以外すべてが列挙されており、「川口の関」は別名「岫田の関」と記されている。このように、八ヶ所の関所の歌枕、名所、地名としてかなり有名であったと思われる。

まず、これら八ヶ所の関所の歌枕、地名が『堀河百首』成立以前にどのように詠じられているかを各歌枕、地名ごとに把握してみたい。その上で、『堀河百首』の歌人達が、それらをどのように捉えていたかを検討してみたい。

なお、本稿においては歌の引用は次の書による。勅撰集、私撰集は『新編国歌大観』。私家集は『私家集大成』に拠った。

逢坂の関

『堀河百首』成立以前に「逢坂の関」がどのように詠まれているかを捉えるために、勅撰集において「逢坂の関」が詠まれている歌を抽出し、勅撰集別に整理してみると次のようである。

古今集	374 別雑	473 恋一	537 恋一	(3)
後撰集	517 恋一	732 恋三	773 恋三	787 恋三
			803 恋四	860 恋四
			982 恋五	984 恋五
			985 恋五	1090 雑
拾遺集	1304 雑四	(11)		
後拾遺集	169 秋	170 秋	1108 秋雑	(3)
	4 春上	278 秋上	279 秋上	466 別
			500 雑旅	676 恋三
			723 恋三	741 恋三
			916 雑二	938
	雑二	940 雑二	(11)	

この表から、各勅撰集に「逢坂の関」は詠じられ、『古今集』以来かなり一般化された歌枕と言えるであろう。『古今集』、『後撰集』においては、恋愛歌が多く、「逢坂」から「逢う」の意味が想定された歌枕の修辭技巧を用いた恋愛歌的発想の歌がほとんどである。『拾遺集』では、秋、雑秋の部立にみられ、それら三首はすべて駒迎えの行事に着目した詠歌である。そのような詠歌は『拾遺集』が初出であり、170・1108の二首は屏風歌であり、屏風絵との影響関係の深さが知られる。169逢坂のせきの岩かどふみならし山たちいづるきりはらのこま
170逢坂のせきの清水にかけ見えていまやひくらんもち月のこま
1108はしりるのほどをしらばや逢坂の関ひきこゆるゆふかげのこま
『後拾遺集』では、春・秋・別・羈旅・恋・雑の部立にみられる。殊に、四季歌や雑の分野の歌数が増化している。田尻嘉信氏が既に、ご指摘されているように、発想の領域を拡張した面で評価されてよいであろう。

春上の部の詠歌は、

4 逢坂の関をや春もこえつらん音羽の山のけさはかすめる
とあり、春を擬人化した趣向になっている。また、雑二の部には三首

(916・938・940) みられ、いずれも「逢坂の関」に「逢ふ」を言い懸け、それを用いた人事詠である。

916 逢坂の関に心はかよはねど見し東路はなほぞ恋しき

938 あふさかの関のあなたもまだ見ねばあづまのこともしられざりけり

940 夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさじ

このように、「逢坂の関」の「逢ふ」との連想が歌枕の基になって、扱われている。

『堀河百首』では、「逢坂の関」を歌枕とした歌は大江匡房(1410)の一首しかみられない。

1410 相坂の関のせきもり出てみよ駒つたひの鈴きこゆなり

この歌は『和漢朗詠集』山水502の下句が発想の典拠として求め、旅の景趣を創り上げている。

502 漁舟水影浪 駅路鈴声夜過山

このように、「逢坂の関」は、『堀河百首』成立以前の勅撰集には多数みられるが、『堀河百首』において一首のみであり、しかも懸詞的な修辭はなく、『和漢朗詠集』に発想の典拠を求め、聴覚的效果を意識し、構成感のある詠作で、発想領域を広げている。

〈河口の関〉

河口の関は伊勢と大和との通路の監察を任としたもので、伊勢国一志郡川口村にあって、一名を岫田の関と言われている。「河口の関」、「岫田の関」という歌枕地名がどのように『堀河百首』成立以前に詠まれていたかを調べてみると、勅撰集や私家集には検索されず、だが、『古今六帖』に見出されるのみである。その『古今六帖』の第二帖の「関」という分類に二首(1029・1030)並べられている。

1029 河口の関のあら垣守れども出て我寝ぬしのびしのびに

1030 河口の関の荒垣いかなれば夜の通ひを許さざるらむ

この二首は、いずれも催馬楽「川口」を典拠とした詠作である。

河口の関の荒垣や 関の荒垣や まれどもはれ まれどもはれ
れ 出でて我寝ぬや 我寝ぬや 関の荒垣

また、「河口の関」は一名「岫田の関」とも言われ、「岫田の関」では「枕草子」や「源氏物語」等に見られる。「源氏物語」の藤裏葉の巻には、

もりにけるくきだの関を河口の浅きにのみは負ふせざらなん

と記されている。

『堀河百首』では、隆源の歌(142)一首のみ見出される。

142もる人もまたたえなくに川口の関のくきぬきはや朽にけり

この歌は、やはり催馬楽「川口」を発想の基とした詠歌で、柵の朽ちかけてしまった川口の関の情景を主題とした詠歌と受けとれよう。

〈清見か関〉

清見か関は『更級日記』に、「清見か関は片つ方に関屋どもあまたありて海までくぎぬきしたり。けぶりあふにやあらむ清見か関の浪も高くなりぬべし。おもしろきことかぎりなし」という記述があり、地形上の様子を窺い知ることが出来るであろう。「清見か関」という歌枕地名は、勅撰集や私家集の詠歌に見出されない。だが、私家集にはそれを歌枕地名とした詠歌が挙げられる。

藤原師氏の『海人手子良集』の「あはぬ恋」という詞書の付いた歌では、

42 なけきつゝかたしき袖にくらぶれば清見か関波は物かは

とあり、「清見か関」と「波」という繋がり、逢うことの出来ない悲嘆の情を詠んでいる。このように、「清見か関」と「波」を詠んだ歌が数多くみられる。それは、清見か関の地形上の条件から「波」と結び付いたと考えられるであろう。「清見か関」と「波」の詠まれた例を挙げてみると次のようである。『橘為仲朝臣集』には、

31 岸近くなみよる松のこのまよりきよみかせきは月そもりくる
とあり、大江匡房の『江師集』に

247 せきもあへぬそてのしつくはよこはしりきよみかせきのなみかと
ぞおもふ

とあり、源俊頼の『散木奇歌集』には「清見か関」という歌題が見出される。

760 あなしふく清見か関のかたければなみとともにてたちかへるかな
このように、「清見か関」と「波」と「月」とを詠じたのは、為仲の歌(31)のみで、「清見か関」と「月」というパターンとしてはまだ、定着されていない。

『堀河百首』においては、「清見か関」を詠み込んだのは師頼の歌(142)の一首みられるのみである。

142 足からの山のもみち葉散なへに清見か関は秋風そふく

足柄山と清見か関という歌枕を詠み込み、しかも、足柄山は相模の国の歌枕であり、清見か関は駿河国の歌枕であるという、地理的条件の相違に着目し、季節の推移進行の差を機知的興趣に拠った詠作である。

〈衣の関〉

「衣の関」は、『堀河百首』成立以前の勅撰集において『後撰集』雑二に一首(116)みられるのみである。

1161 ただちともたのまざらなん身に近きころものせきもありといふなり

「衣の関」という名から衣を連想し、関という機能に寄せた人事詠である。また、私家集では、『実方集』や『為仲集』等に見られる。殊に、『実方集』に「衣の関」を詠じた歌が数多くみられる。それらの多くは「衣の関」の名から想起し、衣の縁語、懸詞などの修辞表現方法に拠った歌が多数を占めている。例えば、次のようである。

336 わかるともころものせきのなかりせはそてぬれましやみやこなか

らも(『実方集』)

18 すきゝたるこゝろは人もわすれしなころものせきをたちかへるま
て(『為仲集』)

いずれも、「衣の関」は、その名前を発想の基とし、修辞方法を利用するための歌枕と言えらるる。

『堀河百首』においては、「衣の関」を詠み込んだ歌として藤原顕仲の歌(1418)一首みられるのみである。

1418 白雲のよそにきゝしを陸奥の衣関を来てそ越ぬる

やはり、「衣の関」の衣の縁語として「着て」を引き、それに「来て」を懸け、修辞技巧を凝らして行旅の歌に仕上げている。

〈白河の関〉

『堀河百首』の成立以前の勅撰集において、「白河の関」が詠まれている歌を勅撰集別に抽出し、歌番号と部立を整理してみると次のようになる。

拾遺集 337別(1)

後拾遺集 93上・477別・518難詠(3)

勅撰集において初出は『拾遺集』である。339は、平兼盛の歌で、詞書きに「みちのくの白河の関こえ侍けるに」とあり、遠くまできたという旅の佗しさを訴える羈旅の歌と捉えられる。

339たよりあらばいかで都へつげやらんけふしら川のせきはこえぬと
『後拾遺集』では、93は、「白河院にて花を見てよみ侍りける」という詞書があり、白河院の名から「白河の関」を連想したという趣向の詠歌である。

93あづまちの人にとははや白河の関にもかくや花はにはほふと
477は、「白河の関」から連想し、「関」に「堰」を懸け、別れの悲嘆の情を詠じている。

橘則光みちのくに下り侍けるに、いひ遣しける

民部公卿長家

477 かりそめの別とおもへと白河のせきとめぬなみたなりけり
518 は能因法師の有名な歌で「立つ」に「発つ」を懸け、季節の推移で空間時間的距離感を表現し、巧妙な構成が成されている。

みちのくにつまかりくだりけるに、白河の関にてよみ侍ける

能因法師

518 みやこをばかすみとともにたちしかどあきかせぞふくしら川のせき

いずれも、陸奥に下る旅の詠歌であり、「白河の関」は都から遠隔地である陸奥の歌枕として捉えられている。

『堀河百首』では、「白河の関」を詠み込んだ歌は次の二首(1417・1423)である。

1417 白河の関にや秋はとまるらんてる月影のすみわたるかな

1423 こえぬより思ひ社やれ陸奥の名になかれたるしら川の関

いずれも「白河の関」の白河からの連想で「わたる」「なかれる」という縁詞を引いている。藤原師時の歌(1417)は、秋を擬人化し、「止る」に「泊る」を懸け、「澄む」に「住む」を懸け、修辞技巧に富み、秋の月の澄明感を詠じている。紀伊の歌(1423)は、陸奥において評判である「白河の関」を主題とした羈旅の歌に仕立て上げている。

〈須磨の関〉

『堀河百首』成立以前に、「須磨の関」がどのように詠まれているかを調べてみると、須磨という地名ははやく『万葉集』からみられるが、「須磨の関」となると勅撰集には見出されない。だが、「須磨の浦」という歌題は『後拾遺集』雑四に見出される。また、勅撰集以外では、『古今六帖』1199と『忠見集』36にみられるのみである。歌合では、長

久二年五月十二日庚申祐子内親王歌合に所所名の中の歌題として見られる。

119 すまの関秋はぎしのぎ駒なべてたかがりをだにせでやわかれん
 36 ときせちはすまのせきにもかはらねばみやこに秋の風やふくらん
 36 は、詞書きから屏風歌で「須磨の関」を詠んだ歌である。119 は、「古今六帖」第二帖おほたかがり分類されて、大鷹狩は月次屏風の画題にみられ、歌材や表現手法からみて屏風歌ではないかと推察される。この二首はいずれも屏風歌ということになる。このようなことから、須磨の関は屏風の画題としてみられ屏風歌や名所題として詠じられ、地名の観念化がなされていったものと思われる。また、「須磨の関」は「源氏物語」須磨の巻の影響に拠って、芸術的イメージが拡がったことも確かであろう。

『堀河百首』では、「須磨の関」を詠み込んだ歌は次の三首である。

1411 波の上に有明の月をみましやはすまの関やにやとらさりせは

1416 いととしく都こひしき夕くれに波のせきもすまのうらかせ

1422 月影の明石の浦をみわたせは心はすまの関にとまりぬ

1411・1422の二首は須磨の関の月が詠まれ、「須磨」に「澄む」を懸け、旅先での月のしみじみとした風情が詠まれている。国信の歌(1411)は『千載集』において、巻八羈旅歌に配列され、「旅の歌として詠める」という詞書が付けられている。

また、俊頼の歌(1416)は、「須磨の関」を直接的に詠み入れているが、『源氏物語』須磨の巻の世界を発想の基盤とし、都への思慕を眼前の景色に寄せ、写實的、視覚的な効果を意識した詠歌である。そして、表現にも特徴的なものがみられる。

この歌の「波の関」とは波の激しい往来に妨げられるのを関所に譬えている。「波の関もる」という表現が、源俊頼以前の詠歌には見られず、『散木奇歌集』に前掲の歌とその他にも一首みられるのみである。その一首は「恨躬恥運雜歌百首」のなかにみえ、『統詞花集』にも載っている詠歌(1457)である。

1457 さらぬだにかわらぬ袖をきよみがたしはしなかけそ波のせきもり

どちらの歌にも、「須磨」「清見瀉」という関所のある歌枕と共に詠まれている。また、俊頼の歌以降に「波の関」「波の関もり」という表現は「清見が関」とか「清見瀉」と共に詠じた例は枚挙に暇がない。この歌が「波の関もり」と「清見瀉」の組合せの端として扱った歌が多くなってきたと考えられるだろう。『和歌初学抄』の「清見が関」には「海辺也、浪ノマヲハカリニスグ、サレバナミノセキモリトイフ」と註されており、「波の関もり」と「清見が関」との組合せに拠って詠まれることが、ひとつのパターン化されていたと捉えることも可能であろう。

このことから、「波の関」「波の関もり」という表現は、俊頼独自の表現と言ってよいだろう。

〈砺波の関〉

砺波の関は、富山県小矢部市蓮沼に置かれていた上代の関所である。「砺波の関」が『堀河百首』の成立以前の勅撰集、私歌集及び私撰集歌合には検索されず、『万葉集』に一首(4085)見出されるのみである。それは、大伴家持の詠歌である。

4085 焼刀を砺波の関に明日よりは守部遺り添へ君を留めむ

このように、「砺波の関」は『万葉集』のみに見られ、『万葉集』から撰取した歌枕地名と思われ、珍しい新奇な歌枕と言えるだろう。

そのような歌枕地名である「砺波の関」を詠じた歌は『堀河百首』において一首みられる。それは、藤原顕季の歌(1413)である。

1413 いもか家にくもの振舞しるからんとなみの関をけふ越くれは

この歌は、『古今集』1110の歌に発想の典拠が求められ、「砺波の関」という、『万葉集』に見られる新奇な歌枕地名と、「いも」という古語を用いて、万葉的な歌の世界を創作している。

1110 わが背子が来べき宵なりささかにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも

〈勿来の関〉

「勿来の関」は、勅撰集において『後撰集』が初出であり、『後拾遺集』に各一首ずつ見出される。『後撰集』では、恋二の部立に

683 たちよらば影ふむばかりちかけれど誰かなこそその関をすゑけん
とあり、『後拾遺集』春上に「春はひむがしよりきたるといふ心をよみ侍ける」という詞書がある。

3 あづまちはなこそせきもあるものをいかでか春のこえてきつらん
この二首は、いずれも「勿来」に「な来そ」を懸けた発想である。683の歌は「勿来の関」と「据える」と共に詠じられ、これと同様の形で詠じられたものが多数見出される。例えば、

5 みるめかるあまの行かふみなとちになこそその関も我はすへめを
（『小町集』）

345 きみこすはしての山にそほとゝきすしはしなこそそのせきをすゑまし
（『実方中将集』）

168 いかなればおほうちやまの道にさへ今はなこそそのせきをすうらん
（『経衡集』）

に見られ、『源氏物語』の常夏の巻に「勿来の関をすゑさせ給へらむ」という記述があり、『後撰集』683の影響関係がみられ、「勿来の関」と「据える」と共に詠むことが『後撰集』683を端として、詠法のパターン化が成されたと思われる。

『後拾遺集』3は、春が東方より来るということから東路にある「勿来の関」を想起している。技巧としては、春を擬人化している。が、このような技巧や発想の典拠は、『亭子院歌合』紀貫之の歌に求められるであろう。

惜しめども立ちもとまらず行く春をなこしの関のせきもとめなむ
このように、「勿来の関」は、「な来そ」という修辭的な用法が優先した歌枕と言えらる。

『堀河百首』において「勿来の関」を用いた詠歌は四首（1414・1499・1420・1424）であり、関の歌題ではいちばん詠まれた歌枕である。それらを具体的にみてみると次のようである。

1414 はるく／＼と尋ねきにけり東路にこれやなこそその関とふまて
1419 なにしておは、勿来といふも我妹子に我てふこさはゆるせ関守

1420 相坂は越にしものを今はたゝなこそその関の名こそつらけれ

1424 恋わひて昨日もけふもこゆへきになこそその関を誰かすへけん
羈旅の歌は141のみで、その他は人事詠と捉えられるであろう。そして、いずれも「勿来」に「な来そ」を懸けた伝統的な修辭を用いた歌である。基俊の歌（1419）は、催馬楽の「葦垣」

葦垣真垣 真垣かきわけ てふ越すと 負ひ越すと 誰てふ越すと
と 誰か 誰か この事を 親に まうよこし申しし ととろける
この家 この家の 弟嫁 親に まうよこしけらしも

のてふ越すの語句を依拠として求めたと思われる。また、「我妹子」という万葉的な語彙を用いて、一つの世界を創り上げている。

永縁の歌（1420）は、相坂に「逢う」を懸け、「勿来の関」に「な来そ」を懸け、修辭技巧を用いながら譬喩表現を駆使した詠歌である。

河内の歌（1424）は、前掲の『後撰集』683を本歌とし、下句の表現順序を多少変えているのみで、ほとんど一致している。「勿来の関」はやはり譬喩として用いている。

『堀河百首』の「関」の歌題で歌枕を詠み込まないのは、藤原公実の歌（1409）と藤原仲実の歌（1415）の二首掲げられる。

1409 いそく道かたく関もりまもるともわれ計をはめさしたくへよ
この歌は、催馬楽「竹河」を発想の基とした詠歌で、「めさしたくへよ」は、語句の表現をそのまま用いたものと思われる。

竹河の 橋の詰なるや 橋の詰なるや 花園に はれ 花園に
我をば放てや 我をば放てや めざしたくへて

また、1415は『史記』の孟嘗君列伝の故事を翻案として詠じている。

この故事は、『枕草子』等⁽⁶⁾の記述にあり、よく知られた故事と思われる。1415遠つ道いそきてすきし関路には八聲の鳥を人そとなへし

この二首は、いずれも出典を求めることができ、それらは詠法の創意工夫の一つと認めてよいであろう。だが、「関」の歌題が歌枕歌題という設定意図を考えると、この二首は特異な詠歌と言つてよからう。

以上のように、歌枕、地名を中心にしてみると、堀河百首題「関」で詠み込まれている八ヶ所の関所の歌枕、地名のうち、半数に当る「河口の関」「清見の関」「須磨の関」「砺波の関」は、『堀河百首』成立以前の勅撰集に見出せない。それらのうち、「砺波の関」は『万葉集』から撰取した歌枕、地名であり、「河口の関」は、催馬楽「川口」を依拠とし、『古今六帖』にのみ詠作がみられる。これらはあまり使用されていない極めて珍しい歌枕地名と言つてよいだろう。

また、八ヶ所の関所の歌枕、地名のうち、「衣の関」「白河の関」「勿来の関」という陸奥に所在する歌枕、地名が三ヶ所もみられ、「衣の関」以外は、複数の歌人に拠つて詠まれ、陸奥の歌枕、地名の興味、関心の強さと受け取ることが出来るであろう。しかも、それら三ヶ所の歌枕、地名は、いずれも縁語、懸詞等の修辞技巧を用いた詠歌が多数を占めているという傾向が端的に指摘できよう。

一方、「逢坂の関」のように、勅撰集では、かなり発想領域の広い歌枕、地名であるにもかかわらず、『堀河百首』では一首しかみえず、懸詞的修辞を中心とした詠作でなく、『和漢朗詠集』を典拠し、行旅の景趣を主題とし、詠法に工夫がみられるのは興味深い。

『堀河百首』は、全体として直接間接の別はともかく典拠を求めて詠

まれた歌が多数みられる。殊に「関」において、催馬楽に原典を求められる歌が三首(1409・1419・1421)みられるのは特徴の一つと揚げられるであろう。公実の歌(1409)は「竹河」に、甚俊の歌(1419)は「葦垣」、隆源の歌(1421)は「川口」に各々語句表現や発想を求めており、1409・1419はいずれも万葉調の歌に仕立て上げ、新奇な詠法と認めるのが妥当であろう。

また、源俊頼の詠歌のように、「波の関もる」という彼独自の表現と歌枕地名との組み合わせがみられ、新たな試みと理解できる。

このように、歌枕地名が歌題設定に重要な係わりをもっている「関」の歌題では、単に、新奇な珍しい歌枕地名を求めただけでなく、新しい発想方法の試みや表現の追求がなされていると捉えて間違いないと思われる。

〈注〉

- (1) 拙稿「堀河百首雑の歌題覚え書」(『文芸論叢』第17号)
- (2) 注1に掲書。
- (3) 田尻嘉信氏「逢坂越」小考(『跡見学園国語科紀要』22)
- (4) この詠歌は『日本書記』卷十三、允恭天皇・八年の条に見出せる。
- (5) この歌は『亭子院歌合』十巻本と廿巻本では作者が異なり、廿巻本では元方と異なっている。また、『夫木抄』では、関に分類され、亭子院の御時歌合紀貫之とあり、なこそその関となっている。
- (6) 『枕草子』(日本古典大系)の一三六段頭の弁の、職にまゐり給ひてに見える。また、同段に見える詠歌が『後拾遺集』943にも見出せる。